

復讐

柴鍊忠臣蔵

柴田鍊三郎

四十七士



復讐
四十七士



柴田鍊三郎

文藝春秋

復讐四十七士

昭和五十三年十月一日

第二刷

定価 一三〇〇円

著者 柴田 錬三郎

発行者 桜 原 雅 春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三番地
電話 東京(二六五)一二一一

郵便番号 一〇二

印刷所 凸版印刷
製本所 中島製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

復讐四十七士 第一部

重
竹内
和郎
著

装
画
D
字
題

暴風雨

一

元禄三年六月上旬——。

播磨灘は、無風であつた。

二本の櫓の帆をだらりと垂らした千石船が、淡路島を遠く彼方に望みながら、潮流に乗っただけのろまな船足で、進んでいた。

船先に立てた丸に鷹羽違いの家紋を染めぬいた旗も、死んだように、そよともせぬ。

播州赤穂浅野家の『笠間丸』であつた。笠間丸、という名称には、意味があつた。

播州赤穂浅野家の初代長重は、慶長六年から同十六年まで、下野国真岡で二万石の大名であつた。長重は、浅野長政（和歌山・三十六万六千五百石・紀伊守）の三男であつた。

長重は、その父長政が、慶長十六年に逝くや、亡父の退隠料として徳川家からもらつていた常陸真壁・五万石を受け継いで、その城主となつた。

やがて、大坂夏の陣に、將軍秀忠にしたがい、武勲があつて、元和八年、同じ常陸に於て、真壁城から笠間城へ移封され、三千石を増された。

長重の子長直が、寛永九年、このあとを継いだ。

すなわち、父子相伝して、二十四年間、笠間の城主だったのである。

この千石船を、『笠間丸』と名づけた理由は、しかし、それだけではない。

いま——。

船内に積んでゐる『赤穂花塩』と、深い関係があつた。

長重・長直が、二十四年間、笠間に於て、異常な苦心をして製りあげたのは、食塩であつた。

常陸国が面する鹿島灘の海水は、決して、良塩を製るのに、適していなかつた。

それが、証拠に——。

幕府が、じかに製つた下総行徳の塩田のそれは、全くの疎塩であり、食塩にならなかつたのである。

しかし、浅野長重・長直父子は、鹿島灘の海水で、充分に食膳にのせるに足りる焼塩を、二十四年間の苦心で、製つてみせたのであつた。

正保二年（一六四五年）、播州赤穂城主・池田輝興が、三十五歳の男盛りで、突如として、発狂し、その妻を斬り殺

し、侍女二人を手負わせた。

池田輝興は、徳川家康の次女督姫を母とし、十六歳にして従五位下右近大夫に叙任した俊才であった。

二代秀忠・三代家光からの寵遇も得ていた。

三十五歳という分別盛りになった俊才が、突如として、発狂し、妻を斬殺し、侍女二人を手負わせたのは、人々に信じ難いことであった。

真相は、公儀隠密下河原某が、大目付・宮崎和甫に命じられて、赤穂の大鷹の館に忍び込み、正室と侍女二人に、兇剣をふるったのであった。その時、輝興は、睡り薬をのまされて、昏睡状態にあった。

輝興が、意識をとりもどした時、いつの間にか、右手に、血刀を持たされていた。

輝興は、本家（池田光政）に預けられ、領土を没収された。二人の子息も、家を継ぐことは許されなかった。

池田輝興を、奸策によって改易にしたのは、大目付・宮崎和甫個人の思案ではなかった。老中・若年寄のうちの何者かが、企て、実行したものである。誰人であったか、不明のまま、今に至っている。

その目的は、輝興から、赤穂の領地を奪って、常陸笠間の浅野長重に、日本一の良質の食塩を製らせるためだったのである。

そして――。

浅野長直は、常陸笠間から、播州赤穂へ移されて来たのであった。色が雪のように純白で、形が軽く、味もやわらかな焼塩の秘法をたずさえて……。

二

『笠間丸』は、五代將軍綱吉に献上の赤穂花塩を、江戸へ運ぼうとしていたのであった。

浅野長直は、正保二年に転封になって以来、寛文十一年隠居し、翌十二年七月に逝くまでの二十六年間、赤穂築城、新田開墾の治績をあげるとともに、文字通り、日本一の焼塩を製りあげたのであった。

長直は、しかし、自身が確信を持つまで、いかに幕府が、献上方をもとめても、これに応じなかった。

長直が、はじめて、赤穂焼塩を、將軍家の食膳に供したのは、移転して来てから二十年も後であった。

爾来、赤穂浅野家では、毎年夏、献上のならわしをつづけていた。

現在――当主は、長直の孫になる二十四歳の長矩であった。延宝八年（一六八〇年）に、祖父の官名をたまわって内匠頭となっていた。

奇しくも、長矩が内匠頭に任じたその年、四代將軍家綱が、四十歳で逝き、五代を、三十五歳の綱吉が継いでいた。

余談になるが……。

池田輝興が、赤穂を改易になったのは三十五歳であり、綱吉が將軍になったのが三十五歳であり、この年から二十一年後の元禄十四年に、浅野内匠頭長矩が、吉良上野介に刃傷に及んだのも、三十五歳であった。

三十五歳という年齢は、播州赤穂浅野家にとって、吉凶いずれにせよ、深い因縁がある、といえる。

船奉行・里村津右衛門が、船内から舳先に出て来た。やりきれぬ面持になっていた。

「この風では、大坂へ立ち寄り、陸路をはこぶよりほかはないかも知れぬ」

すると、いつの間にか、背後に立っていた目付の間瀬久太夫が、年配者のおだやかな語気で、云った。

「海路を、陸路に勝手に変更するのは、許されまい」

親藩・譜代・外様——いずれの大名も、国許と江戸との参覲交替の道筋は、厳しく定められて居り、これを勝手に変えることは禁じられていた。献上品を運ぶのも、これに準じていた。

『笠間丸』の江戸往復は、播磨灘から明石海峡を抜けて、大坂湾から紀伊水道を通過するさだめになっていた。すなわち、これまで、ただの一度も、陸路を運んだことはなかったのである。

「今夏の空模様では、とうてい、この月うちに、江戸到着

は、叶わぬ！」

船奉行は、投げ出すように云った。

『笠間丸』が、どうしても、この六月中に、江戸へ到着しなければならぬ理由は、江戸城内に於ける何か重大な行事に、焼塩を、間に合わせるためではなかった。

先月三日、將軍綱吉は、水戸藩主光圀に、隠居を命じ、水戸領内での永久住居を、命じていた。

將軍綱吉にとって、水戸光圀が、この世で、最も苦手な長老だったからである。

隠居を命じられた光圀は、当然、江戸小石川の屋敷をひきはらって、帰国しなければならなかった。

その光圀に、赤穂焼塩を贈るために、『笠間丸』は、船足をはやめなければならなかったのである。

光圀に、赤穂焼塩を贈るように命じたのは、首席家老の大石内蔵助であった。

「水戸公が、帰国されるまでに、かならず、おとどけいたせ」

内蔵助良雄の厳命であった。

水戸に於ては、鹿島灘で製られるまずい塩が、食膳に供されることを、内蔵助は知って居り、かれが最も尊敬する中納言卿に、せめて、赤穂の精選した焼塩を、あじわってもらいたかったのである。

「お目付——」

間瀬久太夫の従者となつていた横目・杉野十平次が、そつと、云つた。

「思いきつて、鳴門海峡をまっすぐに、突ききりましては、如何でありましょう？」

杉野十平次は、わずか八両三人扶持の最下級の士であり、昨年元服したばかりの若者であつた。

間瀬久太夫は、杉野十平次の提案にうなずき、この旨を、船奉行・里村津右衛門にすすめた。

船奉行の顔色が、変つた。

「ばかなつ！ 貴公は、鳴門の渦巻の恐ろしさを知つて居られるのか！ 先刻、船頭の弥曾次に聞いたところ、この風は、もしかすれば、時化の前ぶれ——すなわち、風の前のしずけさかも知れぬ、とこたえたのでござるぞ」

すると、杉野十平次が、何気ない口調で、

「その時は、わたくしめが、海神の怒りをしずめる人柱になりまする」

「……………」

船奉行は、無言で、十平次を、睨みつけた。

三

三十余年間、海で生きぬいた船頭弥曾次の予測に、あまりはなかつた。

異常な熱氣をふくんだ風は、まさしく、暴風雨の前徴で

あつた。

雨を交えた烈風が、にわかに吹きつけて来たかと思ふや、帆を下げるいとまもなく、あつという間に、空は不吉な厚い雲で掩われた。

時刻はまだ、申刻（午後四時）を過ぎたばかりであつたが、海原は、おぼろげのうちに幽くなつた。

吹きつゝつて来る烈風の速度は、早かつた。

しかし——。

『笠間丸』は、すでに、鳴門海峡のまん中に、進み入つていた。

鳴門の海翻に巻き込まれ、舳先が破れて、潮水が、船中になだれ込むのに、今日の時間で、ものの四十分もかからなかつた。

からうじて帆は下げられたが、そのために、船は、かえつて、鳴門の渦巻へ向つて突進しようとした。

「お目付！ 手前が、人柱になりまする！」

杉野十平次が、篷に走り入つて来て、間瀬久太夫に、告げた。

さして表情もこわばらせてはいなかつた。

「十平次、お前は、迷信を信じるのか？」

「信じはいたしませぬ。しかし、船頭や水主衆の心をしずめるのでありますれば、これも、やむなき仕儀と存じます」

十平次が、きっぱりとこたえた時であった。

板壁へだてた次の間から、一人の少年が入って来た。

「人柱のお役目、それがしが、つかまつりたく存じます」

間瀬久太夫には、はじめて見る少年であった。

十四五歳であろうが、小柄で、肩が落ち、膝に置いた両手の指が、少女のように優しい細さであるのを、久太夫は、視た。

「そなた、士家のせがれらしいが……?」

「いえ、さむらいではありませぬ」

そうこたえたものの、少年の双眸には、町家の子などには見られぬ強い光があった。

「何故に、代りに人柱になろうと決意した?」

「おのが一命の運を試したく存じます。もとより、海神などの存在を信じては居りませぬ」

「……?!」

間瀬久太夫は、杉野十平次に、灯をともさせて、そのあかりで、少年の顔立ちを、見なおした。

船には、在府の家士の親戚の者や、あらたに奉公する者を、幾人か便乗させていたので、この少年も、定府の誰かに所望されて、江戸屋敷へ奉公に行く一人だ、と思っていた間瀬久太夫は、その顔立ちをあかりの中にはっきりと見て、

——似ている!

と、ひとつのおどろきをおぼえた。

首席家老・大石内蔵助良雄の若い日の面貌を、その少年の顔立ちに、久太夫は、看とったのである。

間瀬久太夫は、寛文六年(一六六六年)から延宝三年まで、九年間赤穂に謫居せられていた山鹿素行の寓居で、いま京都屋敷留守居をしている小野寺十内とともに、門弟として教えを受けていたが、その頃、元服前の大石良雄が、時折り、その教授を聴きに來ていたので、内蔵助の少年期の面貌を、よくおぼえていた。

「そなた、姓名は?」

「小山独歩と申します」

「小山独歩?!」

久太夫は、さらに、眉宇を深くひそめた。

久太夫は、目付という職掌柄、大石内蔵助の先祖に就いて、くわしい知識を持っていた。

大石家は、鎮守府將軍・藤原秀郷から出ている。

藤原秀郷は、山城国田原庄の庄司であった。田原藤太秀郷という所以である。秀郷は、関東におもむいて、平將門を討った際、次男を近江の大石庄にとどめておいた。すなわち、内蔵助の先祖である。

秀郷の長男は、父にしたがって、関東へ出て、小山氏となった。この小山氏から、宇都宮、佐野、結城などの豪族がわかれた。姓はそれぞれ異ったが、いずれも紋章が、二

頭右巴であるのが、その証拠である。大石庄に在った秀郷の末裔は、応仁の乱で、一家すべて討死し、世嗣が絶えたので、関東の小山家から、久朝という者を迎えて大石家を再興していた。

もとより、少年の小袖は、無紋であり、郷士の息子のいでたちであったが、姓が小山ときいた瞬間、間瀬久太夫は、はっきりと、

——これは、首席殿のかくし子にまぎれもない！と、確認した。

目付として、首席家老にかくし子がいたことを知らなかったのは、うかつといわれてもしかたがなかったが、実は、大石良雄は、十九歳で内蔵助と称してその重職に就いてからは、公私の生活に厳しいけじめをつけ、家中一統にその私行を絶対に見せも聞かせもしなかったのである。

「お願いつかまつります。人柱になること、何卒、わたくしに——」

小山独歩と名のる少年は、眼^{まなこ}眸をびたりとすえて、願った。

——首席殿は、このかくし子に、独りで歩め、と……独歩と名づけられたか！

間瀬久太夫は、感慨をもって、少年の光る視線を受けとめた。

その時まで、沈黙を守って、ひかえていた杉野十平次が、

「人柱のお役目、これなる御仁にゆずるわけには参りませぬ。この鳴門海峡を通ることを進言いたしたのは、てまえ杉野十平次でありますし、もし時化に遭うた際は、自ら人柱にすると、船奉行殿に対して、てまえは誓って居ります！」

と、語気強く、云った。

杉野十平次は、もとより、これが首席家老のかくし子であらうなどとは夢にも気づく由もなかったが、自分より二つか三つ年下の少年を、犠牲にすることは、武士の面目として、できなかった。

十平次自身、肉親の縁がうすく、生れた時母を喪^{うしな}い、十歳で父とも死別した孤児だったのである。

この身をすてることを、歎く両親を持たぬ気楽さがあつた。

小山独歩は、やおら頭をまわして、十平次をみやると、「お手前には、お目付に従った横目としてのつとめがある」と存ずる」と云った。

こうした問答のあいだも、船体は、いまにも砕けそうに、凄じい波浪に打たれ、きしみ、ゆれていた。

二人の少年は、それぞれ、おのれの決意を云いはって、ゆずらなかつた。

間瀬久太夫は、どちらを人柱にえらぶか、決断しかねた。船奉行・里村津右衛門が、船頭弥曾次をともなつて、降

りて来ると、

「杉野十平次、この期に及んで、おびえたか！」

と、呶号した。

間瀬久太夫が、十平次に代つて、事態を説明した。

船奉行は、十平次が誓つたのであるから、当然、その当人が役目をはたすべきである、と云つた。里村津右衛門は、小山独歩という少年になど、一瞥もくれようとしなかった。「では、てまえが——」

十平次が、立ち上りかけると、船頭の弥曾次が、

「こういう際は、わしらは、鑑できめるならわしになっておりますがのう」

と、云つた。

「うむ！」

間瀬久太夫は、うなずいた。

その時、血相を変えた一人の足輕が、とび込んで来て、両手をつかえると、小山独歩に向つて、

「若っ！」

と、叫びかけた。

足輕は、寺坂吉右衛門といい、ひそかに、大石内蔵助の命令を受けて、独歩の供をしていたのである。

水鳥を斬る

一

寺坂吉右衛門は、首席家老・大石家の足輕であつた。

当時、赤穂の城代家老は、大野九郎兵衛（六百五十石）がつとめていたが、これは、かれが、大石良雄よりはるかに年配者で、経理に熟達していたためであり、家臣筆頭は、やはり、家格に於ても、禄高（千五百石）に於ても、内蔵助であつた。

当然——。

大石家の足輕が、

「若っ！」

と、叫んだ少年へ、それを内蔵助良雄のかくし子と看破つた目付・間瀬久太夫を除いて、船奉行・里村津右衛門も横目・杉野十平次も、不審の視線をそそいだ。

——この足輕、われを忘れたあまりであらうが、まずいことを申した！

間瀬久太夫は、とつさに、思慮をめぐらし、小山独歩と名のる少年に向つて、

「そなたは、常陸の笠間の、首席殿の遠戚にあたる家のせがれであろう？ 赤穂へ、塩田でも見学に参つて、笠間へ帰るのではないのか？ たぶん、そうであろう」と、云った。

久太夫の目の色が、——そうだとこたえよ、と求めているのを、少年は、見て取り、足輕の失敗をつくろう、廻転のすばやい頭脳を持っていた。

「はい」

小山独歩は、うなずいた。

浅野家に、大石良雄の曾祖父内藏助良勝が仕えたのは、慶長九年（一六〇四年）十八歳の時であった。かれが、主人と仰いだのは、浅野長政の三男采女正長重であった。

大石良勝は、小姓として十余年を経て、三百石を給する身となり、元和元年（一六一五年）の大坂城攻めの夏の陣には、従兄大石兵左衛門とともに、豊臣方七将星（真田幸村・木村重成・後藤又兵衛基次・長曾我部盛親・明石掃部助全登・大野主馬首治房とならぶ）毛利豊前守勝永が率いる軍勢と死闘し、従兄兵左衛門は討死したが、かれは、名のある武辺の首二級を取った。爾来、主人長重に重用され、やがて家老となり、千五百石の封禄を食んだ。

大石家は、良勝・良欽・良昭、そして良雄となる。

浅野長重とその嫡男長直の親子が、元和八年（一六二二年）から正保二年（一六四五年）までの二十四年間、城主

であった常陸国笠間に於て、城代家老をつとめたこの大石家の親族縁戚が呼ばれ、あるいは慕うて来て、家臣となり、または郷士となったことは、当然考えられる事実である。

浅野家が、播州赤穂に転封を命じられた際、郷士として土着していた大石家縁戚の者が、笠間に残ったことも、また、容易に想像できる事実である。

間瀬久太夫は、とっさに、少年を、その大石家縁戚の笠間郷士の子にしたたのであった。

少年は、みごとに、久太夫の思慮に^{こゝろ}応えてみせた。

「では、海でくらす者がつくったしきたりにしたがって、鑑を引かせようか」

久太夫が云うと、杉野十平次と小山独歩は、ともに、頭を下げた。

「弥曾次、鑑づくりは、誰がつとめる？」

久太夫が、船頭に問うと、船奉行であろうという返辞であった。

寺坂吉右衛門は、必死の訴えを、その双眸にこめて、間瀬久太夫を見つめたが、足輕の身分として、もはや、この処置に、口をさしはさむことは、許されなかった。

船奉行が、神棚からずらした伊勢大神宮一萬度の御紋の御幣で、二本の観世こよりをつくるのを、一同は、重苦しい沈黙をまもって、待った。

こよりの一本には吉、もう一本には凶、とその端に記し

て巻き込んだのは、船頭弥曾次であった。

「十平次、お前が、さきに引け」

船奉行が、二本のこよりをにぎって、さし出すと、命じ
たのは目付・間瀬久太夫であった。

「はい！」

十平次は、合掌したのち、なんのためらいもなく、右手
をさしのべて、その一本をつまんだ。

「……南無……八幡！」

思わず、声に出してひくくとなえたのは、後方にひかえ
た寺坂吉右衛門であった。

十平次は、ずっと、船奉行の掌の中から、こよりをひき
抜くと、作法にしたがって、すぐに見ようとせず、膝の上
に置いた。

小山独歩が、同じく、次の一本を手にとると、

「おのおの、抜くがよい。吉と記されたのを当てた方が、
人柱と相成る」

間瀬久太夫が、云った。

十平次と独歩は、それぞれ、しずかに、こよりの端を、
ひらいた。

「わたくしが、当りました」

なにげない口調で、そう告げたのは、独歩であった。

足軽・吉右衛門の顔面から、血の色が失せた。

二

人の佇立を許さぬ暴風雨は、文字通り千石船をもてあそ
んでいた。

十四歳の小山独歩が、船頭から与えられた白衣をまとい、
頸を三重に巻く長い珠数に人柱となった莊嚴を示して、船
上に出た時、紀伊水道は、暴風雨圏のまった中であつた。
烈風は、雨とともに、黄昏の暗さを送りつけて来ていて、
舳先に激突する波浪が砕け散る飛沫だけが、白くあざやか
であつた。

船神・潮神の怒りをしずめるべく、渦巻く鳴門海峡へ、
身を投げる小山独歩の姿を、じっと見送つたのは、船奉
行・里村津右衛門、目付・間瀬久太夫、横目・杉野十平次、
そして船頭弥曾次の四人であつた。

独歩は、烈風にさからいつつ、舷をつたって、舳へ進
んだ。

と、みるや——。

砕け散る白い飛沫へ向って、決死の人柱らしい勇敢さで、
両手を大きく、翼のようにはばたかせて、身をおどらせた。

間瀬久太夫は、万感をこめて、深い溜息をついた。

船頭の弥曾次は、一方の舷から、身をのり出し、

「金毘羅大権現のお加護を！」

と、昏い海上へ向って、絶叫した。

その海上には、すでに一艘の橋舟がおろされ、木の葉のように、ゆれていた。弥曾次のはからいであつた。

橋舟には、足輕・寺坂吉右衛門が、乗っていた。

暴風雨は、襲つて来るのも速ければ、去るのも迅かつた。そのなごりの波の高いうねりに乗つて、小さな橋舟は、ひとつの奇蹟を生んでいた。

足輕・寺坂吉右衛門が、人柱となつた少年を、ひきあげて、抱きかかえていたのである。

独歩は、意識を喪つていた。

橋舟は、播磨灘側の、淡路島の雁子岬の沖をただようていた。

吉右衛門は、独歩を怒濤の中から救い、水を吐き出させた無我夢中の働きのあとの疲労の中で、この奇蹟そのものといえる幸運を、

「おりよう様！ かたじけのうございました！」

と、宙を仰いで、一人の女人の靈魂に助けられたことを、信じていた。

おりようという女人は、吉右衛門が、かかえている少年の母であつた。

おりようは、大石良雄が、祖父良欽の逝去の跡を継ぎ、（父良昭はすでにその四年前に他界していたので）十九歳で内蔵助となり、世祿千五百石を承けて、家老となるまで、

その身のまわりを世話した侍女であつた。

内蔵助良雄は、家老となるとともに、但馬豊岡の領主京極甲斐守の家老・石東源五兵衛毎公の娘りくを、妻に迎えたが、それを機会に、おりようは、大石邸を去つたのである。その際、おりようは、臨月の腹をかかえていた。

おりようが大石邸を出るにあつて、内蔵助良雄は、一人の足輕を、供させた。寺坂吉右衛門であつた。吉右衛門は、まだ十六歳で、おりようよりひとつ年下であつた。

天涯孤独のおりようが、身を寄せたのは、佐用郡佐用村——宮本武蔵の出た宮本村にすぐ近い、因州鳥取から播州に通じる参観交替の、江戸往復の因播街道からそれて、ほんのすこし登つた山間の農家であつた。

そこは、吉右衛門の母親の生家であつた。離れ家があらたらしく建てられて、おりようを、迎えた。

難産であつた。

おりようは、おのが命を落しても、子を産みたい一念で、苦しみに堪えた。ぶじに、子を産むことができたが、おりようの健康は回復せず、寝たり起きたりの三年間を、その離れですごし、燈明が尽きるように、かぼそい病軀を、この世から消した。

吉右衛門は、そのあいだ、ずうっと、おりように仕え、独歩と名づけられた嬰兒を育てたのであつた。

おりようは、肌が紵のように、薄く、白く、透つた美し

い娘であった。そして、はかなく、短命であったゆえに、彼女が逝ったのち、吉右衛門の心の中で、その美しい姿は、さらに哀しい神秘さを加えた。

吉右衛門は、独歩が七歳になるまで、おのれの手ひとつで、育てておいて、主人の命令によって、少年をその離れにのこしておいて、赤穂城下へ帰って来た。

独歩との別れは、わが身の皮を剥がれるほど苦痛であったが、

「独り歩きさせい」

主人のその命令に、さからうことはできなかった。

爾来、吉右衛門は、一度も、独歩に逢っていないかった。

おりょうの^{おきりょう}倅をとどめている十四歳の独歩の容姿に接したのは、つい、十日ばかり前であった。

大石良雄が、内密で、はじめて、屋敷へ呼び寄せたのである。

「生涯の望みがあれば、きいてやろう」

実父から、そうもとめられた独歩は、ためらわず、

「江戸へ出て、一流の剣術者に師事し、正しい剣を学びたく存じます」

と、こたえた。

独歩は、すでに、そのむかし、宮本武蔵が幼い頃そうしたであろうように、佐用の山中で、立木を木太刀で^{くろぎ}搏ち、猪を追ってこれと闘う独習を、一日も欠かさずに、つづけ

て来ていた。

そのことをきいた内蔵助は、

「独りで習うた業をみてくれようか」

と、木太刀を把って、庭へ出た。

内蔵助は、讃州高松の人で、無我と号する東軍流の達人奥村権左衛門に、剣を学んで、免許を得た腕前であった。

独歩は、その父の東軍流剣術に対して、独り習った木太刀を使って、けもののように、すばやく、しなやかに、小軀を躍らせた。内蔵助は、受け損じはしなかったが、しばしば、十指がしびれた。

「判った」

木太刀をおろした内蔵助は、吉右衛門を呼び、独歩の供をして、出府せよ、と命じたのであった。

三

海が、なごりなく凪いだのは、次の日の暁であった。

陸には、盛夏の暑気が、おとずれていた。

赤穂浅野家の首席家老の落し胤と、その供の足輕は、堀の湊に上陸して、まっすぐに、京都をめざしていた。

吉右衛門は、独歩の足どりの軽さ、早さに、ひそかに、舌をまいていた。

「吉右衛門」

「はい」

「お目付だけは、わたしが何者か、看破っておいでのようにあった」

「……」

——ご家老は、ただの一度も、佐用においでなさらなかった。ご家老ならば、ご領内巡察という名目で、いくらでも、おりよう様に逢いにおいでになれたものを……。

吉右衛門は、独歩の言葉に相槌を打ちながら、胸の裡では、別のことを考えていた。

内蔵助良雄が、一度もおりように逢いに来なかったのは、その意志の強さ固さを示しているが、同時に、人間として氷のように冷たい性情の持主ではなからうか。

吉右衛門は、内蔵助良雄がおりようを愛していた、と信じていた。血気にまかせて、本能の欲情のおもむくままに、おりようのからだでそれを満たしていたにすぎなかった、と思いたくはなかった。

「吉右衛門、わたしの申ししていることを、きいて居らぬではないか！」

不意に、きびしい語気で、そう云われて、吉右衛門は、あわてて、

「申しわけございませぬ。……その、つい……」

「つい、なんだ？」

「は——、若が、こうして、ぶじに、大地を踏んで、歩いておいでになるよろこびで——」

「われを忘れていた、というのか？」

「はい」

「そうではなからう。別のことを考えていたのだろう」

独歩は、吉右衛門のうろたえた表情に、いたずらっぽく笑ってみせた。

「お許しのほどを——」

吉右衛門は、頭を下げた。

「京都屋敷のお留守居は、どんな御仁か、お前、きき及んでいるか？」

小野寺十内のことであった。

二人は、とりあえず、小野寺十内があずかる浅野家京都屋敷を、たずねようとしていたのである。

「わたくしのきき及びますところでは、高潔なお人柄にて、いつも、温顔を保たれ、家中のかたがたのうち、一人として、その怒声をきいたことはないばかりか、不機嫌なご様子を見たこともないそうでございます。歌道にも、秀れておいでの由でございます」

「欠点のない人物など、この世にいるのか？」

独歩は、ふっと、大人びた言葉を、独語するように、もらした。

「小野寺様に関するかぎり、誰人も、かげ口のたたきようなない御仁だそうでございます」

「ふうん」